

〈シンポジウム 21世紀へ向けた角層研究の幕開け〉
(角層機能からみたセンシティブスキン)

ま と め

坂本 一民*, 川島 眞**

Summary of the Symposium: What Is Sensitive Skin in View of
Stratum Corneum Functions

Kazutami SAKAMOTO,* Makoto KAWASHIMA**

皮膚科学的に定義や科学的裏付けが確立されていない「敏感肌」という言葉が、種々の日常的な場面で使われ一人歩きしている感がある。この傾向は海外においても同様であり、「sensitive skin」として表現され議論もされている。そこで本シンポジウムでは日本語として確立されていない「敏感肌」をあえて英語の「sensitive skin」と表現することで学術的な議論の対象とし、種々の立場からの認識を紹介し共通認識を確立する試みとして企画した。さらに、論点を絞った議論を進める目的で「角層機能から見たセンシティブスキン」を共通のタイトルとしてシンポジウムを実施した。

まず、オーガナイザーである東京女子医科大学の川島から、上記を含めた本シンポジウムの趣旨を説明しスタートした。次に味の素の坂本より「香粧品科学からみたセンシティブスキン」と題し、欧米の皮膚科学者・皮膚科医の見方を紹介し、あわせて国内化粧品メーカー研究者100名からのアンケートをもとにした、香粧品開発担当者の考える「センシティブスキン」についてオーガナイザーとしての話題提供を行った。

次に資生堂の傳田氏より「乾燥ストレスとセンシティブスキン」と題して、センシティブスキンの代表的な状態と考えられる皮膚の乾燥について最近の研究成果の紹介をいただいた。環境の乾燥は季節変化だけでなく、家庭における空調の普及や密閉型住宅など最近の生活環境変化のなかでも顕著であり乾燥ストレスとして皮膚の状態に影響する。傳田氏は乾燥ストレスによる角層の生理的、物理的機能変化について新たな知

見を交えて説明された。とくに未解明の部分の多い角層のバリア機能調節メカニズムについて表皮中のイオン、プロテアーゼ活性、脂質バランス等の新しい知見について紹介のうえ、これらの維持向上に関する皮膚の感受性低下としてセンシティブスキンを説明された。

鐘紡の大田氏からは「スティンギングとセンシティブスキン」と題し、ヒリヒリ、ゾリゾリ、チクチクといった炎症を伴わない感覚刺激であるスティンギングに関し、その定義、試験法、角層機能に関する総括的な説明をいただいた。スティンギングの有無は消費者が化粧品を用いたときに感ずる最初の感覚であり、用いた化粧品の良否の決定要因であると同時に、肌の状態の自己判別法でもある。大田氏は乳酸等を用いるスティンギング性（肌の感受性）の評価法の詳細とあわせて、角質機能との関連に関して角層水分量、TEWL、皮脂量などの皮膚生理パラメータとの関連を紹介された。さらに香粧品科学者の立場から、このような研究の進展による、センシティブスキンと角層機能の関連性の解明と、これをいかした敏感肌用化粧品や、さらに要因別敏感肌用化粧品の開発についても触れられた。

次に、皮膚科医の立場から東邦大学の伊藤先生より「皮膚科医から見たセンシティブスキン」と題し、臨床現場における患者が訴えるセンシティブスキンと、これに対する皮膚科医の見方についてのお話をいただいた。「敏感肌」という言葉がすでに患者が自己診断

* 味の素(株)アミノサイエンス研究所
〒210-8681 川崎市川崎区鈴木町 1-1

** 東京女子医科大学皮膚科
〒162-8666 東京都新宿区河田町 8-1

* AminoScience Laboratories, Ajinomoto Co., Ltd. (1-1, Suzuki-cho, Kawasaki-ku, Kawasaki 210-8681, Japan)

** Department of Dermatology, Tokyo Women's Medical University (8-1, Kawada-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8666, Japan)

に用いる用語として日常的になるなか、それぞれ患者、皮膚科医がこれをどうとらえているかについてアンケート調査結果を中心に説明された。患者はすべての皮膚トラブルを敏感肌とする傾向にあるが、診療・治療する立場の医師から見た場合診断名のつく症状と、患者の思いこみが混在しており認識のずれがある。敏感肌という状態については多くの皮膚科医が認識しており、バリア機能の低下、刺激閾値の低下、乾燥等が主因としてあげられた。

最後に、同じく臨床医の立場から東京女子医科大学の有川先生から「アトピー性皮膚炎とセンシティブスキン」についてのお話をいただいた。同大学皮膚科医のアンケートにおいてスティンギングというものが専門家の立場からはほとんど認知されていないことは、本シンポジウムのテーマであるセンシティブスキン(敏感肌)の例ともあわせて、慣用語がいかに実態のないまま流布しているかの好例とも考えられる。有川

先生はアトピー性皮膚炎の素因であるバリア機能の低下とあわせて、メンタルな面から見たセンシティブスキンという観点から患者の無意識な心理ストレスによるかゆみの増悪を例に、心理的要因の重要性を紹介された。

以上のシンポジストの話題提供をもとにパネルディスカッションを行った。センシティブスキン(敏感肌)の症状や原因に関する認識の確認や、多くのアンケートで半数以上が敏感肌と自己診断する例などから、この現象を一般的現象、現実の問題としてとらえる必要性が議論された。最後に川島より、シンポジウムのテーマとして取り上げてみて、改めて言葉自体の曖昧さが明らかになったこと、科学的な言葉として確立するためにはさらなる科学としての事実認識と解析を進める必要性のあることを強調して本シンポジウムを終了した。